「暮らしの質」向上検討会（第1回） 議事要旨

1. 日 時：平成26年11月28日（金） 10:30～12:00
2. 場 所：本府3階特別会議室
3. 出席者：
  - 委員（50音順）
赤池委員、有川委員、石田委員、沖委員、門倉委員、西郷委員、白土委員、
藺田委員、高島（宏）委員、高島（郁）委員、枅野委員、光畑委員、宮原委員、
やました委員、横山委員

  - すべての女性が輝く社会づくり推進室
有村女性活躍担当大臣、古谷室長、久保田次長、華房次長、別府次長、小八木参
事官、田中参事官、水本企画官
4. 議事次第
  - （1）開会
  - （2）有村大臣挨拶
  - （3）委員自己紹介
  - （4）検討会の趣旨及び進め方について
  - （5）意見交換
  - （6）その他
  - （7）閉会
5. 議事の経過
  - （1）開会
華房推進室次長の司会により、開会。

  - （2）有村女性活躍担当大臣挨拶
安倍内閣においては、女性が輝く社会の実現を最重要課題の一つとして掲げている。
すべての女性の方々がその生き方に自信と誇りを持っていただける社会を実現してい
くという、相当の思い入れを持っている。
「すべての女性が輝く政策パッケージ」をこの10月にまとめた。これは、女性が生ま
れてから人生を送る中で、仕事をするしないにかかわらず、家庭との両立も支援する、
職業生活においても女性を支援する。働かないけれどもその地域で活躍したい、家庭の

安全や自分の健康を守りたい、と女性にはそれぞれライフステージがあり、ライフスタイルがある。その中で、日本がこれからの浮沈をかけて活力のある社会にしていくためには、それぞれの御家庭でも、それぞれの女性自身に輝いていただくこと、そして、心の安寧を持ち、それぞれ持てる能力や意欲を発揮していただくことが大前提であり、そこはある意味では日本の最大の潜在力である。潜在力、すなわち能力や意欲、可能性はありながら、まだまだ発掘し切れていない、そういう日本の力であるという前提に基づいている。

初代のその担当に就き、少しでも前に進めていかなければいけないという思いで私も答弁を重ねてきた。

委員各位は、本当に各界で非常に深い洞察力を持って御発言をされている、あるいは実績を上げている方々ばかりである。相当この人事には、担当大臣としての意向も反映をさせていただいた。

東日本大震災を経験した私たちの人生は、おのずからその震災を経験しなかった人生とは違うものになってくる。被災地の皆様が、寒い寒い中で温かい御飯をお椀に盛って食べさせてもらえる、何とありがたいことかと涙を出された。特別なハレの日の、祭りの日の楽しさも良いが、実は私たちは何気ない、何もない日常こそが幸せそのものであった、あるいは幸せの原点そのものであったということを天災の多い日本にあって改めて気づかされた。

日々の暮らしを丁寧に重ねていく、見つめていく、その中で心の平穩を築いていく、そういうことができる日本は、世界の中でもまだまだ心の豊かさ、心の先進国としての貢献ができ得るものがある。目に見える公共事業というのも国土の強靱化という意味では一つのやり方であるが、あと1つ物を持てば幸せになるという時代ではないということを見ながわわっている中で、では、どこをどうしたら私たちの心の安寧が、あるいは家族の安全が、あるいは本当にいいなという日本の魅力が内外に伝わるのか、そして、それは主権者たる、納税者たる国民の皆様から納得し、支持をしてもらえる税金の効果的な使い途、再配分になるのかを考えて行動していかなければならない時期に来ている。

私自身も小さい子供が2人いるが、実際に妊娠し足元が見えなくなり、働きながら母乳をあげ、全国を走りながら、そして、母乳を冷凍にして保育園に送りながらやってきた。女性にとって、道の段差数センチは、ベビーカーを運ぶ上でも大変ハンデである。例えば杖を引いている方や目の不自由な方、あるいは体力も充実している男性のキャリアの方々も、出張用のキャリーバッグを抱えているとこの数センチが、本当に段差が面倒だなと思われる方もたくさんいらっしゃる。女性にとって住みやすい社会をつくることは、結果として女性がそのメリットを享受するだけでなく、男性も、また障害のあるなしにかかわらず、高齢者の方々もそのメリットを享受することになる。

当然、女性にフォーカスをしているが、その視点を生かす、女性の安心を増すことによって、結果として社会全体の安寧や充足感、本当の心の豊かさを実現、体現していけ

る機会の第一歩をいただいた。

皆様の忌憚のない御意見、そして、こうやったらそれぞれの御家庭や地域が元気になる、結果として活力ある日本ということ、そして、どの国にも負けないような心の豊かさ、心の先進国としての体力や知恵を持っていると認めていただけるようなお知恵をお聞かせいただきたい。

期せずして解散になったが、女性の活躍を推進するという点においては、何ら変更ない。

(3) 委員自己紹介

有村大臣の挨拶後、本検討会の座長は、委員の中から女性活躍担当大臣が依頼することから、宮原委員に依頼。まず宮原座長より自己紹介の後、途中退席予定の門田委員、光畑委員より自己紹介。その後、名簿順に自己紹介。

○宮原座長

私は大学卒業後、化粧品会社の資生堂へ入社し、営業やマーケティング、人事労務全般を担当、特に男女共同参画やワーク・ライフ・バランスといった分野に注力してきました。女性社員の比率が約7割の会社であり、女性活躍推進という意味では先進的な企業であった。資生堂は、リンスインシャンプーや落ちない口紅などを他社に先駆けて上市した。化粧品に関する研究所なども有しており、女性のマーケティングに関してはさまざまな経験をした。育児休業後は、ほぼ100%の女性が職場に復帰する。育児短時間勤務の女性は全国に約1,500名おり、私は人事部時代に仕事と家庭の両立支援に熱心に取り組んできた。

資生堂の在職当時は、店頭美容部員は育児を経験した女性大勢が、子育て中のお母さんに3分でできる朝のメイクなどを提案し、育児の経験を仕事に生かして活躍している方が多かった。子育てを経験した社員は売上向上にも大きく貢献していたと実感している。

45歳で資生堂を特別退職し、現在は東レ経営研究所でダイバーシティや、ワーク・ライフ・バランスという分野で、企業や地方自治体、労働組合で講演、ワークショップ、コンサルティングなどを実施している。女性が活躍しやすい、あるいは生活しやすいとイコール、高齢者障害者、ひいては今は男性でバリバリ働いている方でも、徐々に体力が落ち生活するのに不自由な年代も迎えてくることから、快適な社会の実現というのは全国民に対する必要不可欠なテーマだと思っている。

今回お集まりの様々な分野の方々から様々なアイデアを御発言いただき、クオリティ・オブ・ライフの実現を前に進めていきたいと考えている。

○門倉委員

父が日本人で、母がドイツ人である。父の仕事や自分の仕事の都合で、日本、アメリカ、ドイツ、イギリス、香港などいろいろなところで生活をしてきた。日本の大学を卒業後はドイツ系の証券会社に勤務し、20代は証券関連の仕事をしていましたが、夫の留学をきっかけに料理の専門学校に通い、卒業した。以降、料理の仕事をするのをきっかけに、ドイツのライフスタイル、ドイツ人の合理的な暮らし方、考え方をテーマに、今では執筆活動や講演会を行っている。

「暮らしの質」は、一人一人の意識が大事である。考えるきっかけを提供したい。

○光畑委員

モーハウスという授乳服をつくる会社を経営している。母乳をあげるときに胸が見えないような服というのをつくっている。私自身、子育てをする中で、赤ちゃんを連れて外に出て、電車の中で子供が泣いて、もうどうしようもなくなり授乳をせざるを得なかった体験がある。この経験から、お母さんが外に出られない、その原因の一つがこうした環境にもあるということから、もっと簡単にできる服という環境で解決しようと考え、つくってきた。

内閣府とは「子連れワークスタイル」のほうで時々話をさせていただいているが、私自身、赤ちゃんを連れて働いていた。赤ちゃんをだっこしたまま働くというワークスタイルを始めて、今までスタッフ二百何十名がこの働き方を経験している。都内では青山の店でもこうした形で赤ちゃんをだっこして働いています。

お誘いいただいて、APEC女性と経済フォーラム2014へ初めて、参加した。女性の活躍は、日本で非常に遅れていると言われており、私たちの取り組みを世界にどうアピールできるのかと思った。

女性が働くことが実現できている各国の方からも、比較的こうした働き方であるとか、母乳を外でもあげられるということは評判がよかったと聞いている。

私自身は子供のころ商店街と病院で育っているので、女性が働くというのは当たり前であった。生活と仕事と一緒にあるのは当たり前だったので、これができるだろうということを考えてきた。そうしたワークスタイル、生き方というのは、日本にそもそもあるものではないかと思う。日本が本来持っていたいいところをどんどん日本から発信していくということが今後できると良いと思う。

○赤池委員

1996年に現在の研究所を設立し、ユニバーサルデザイン、サステナブルデザインに基づく商品、施設、地域開発を手がけてきた。

健康で安定した暮らし、妊娠・出産・子育てを支援するときに、製品とか施設とか空間からアプローチしていくという考え方も非常に重要である。私自身も一男三女4人の子供たちを苦労しながら育ててきた問題意識から、10年前に経済産業省にキッズデザイ

ンという考え方の重要性を提起した。子供目線、子供基準で安心安全な環境をつくっていく、子供の創造性の開拓、陶冶に貢献するようなデザインを考え、あるいは子供を産み育てやすい環境づくりを考えていくということで、NPOのキッズデザイン協議会が設立され、過去8回、キッズデザイン賞の委員長をずっと務めてきた。既に約1,200点の受賞作品があり、こういう製品や施設みたいなものを有効活用することで、任せられるものならキッズデザイン製品や施設に任せてしまっ、それで有用な社会参画のための女性の時間をつくっていくということがすごく重要であると思っている。

こういう取り組みは、中小企業のいろいろな物づくりの基盤整備の、例えばサポイン事業や、安全設計についてはJIS化も進めているので、地方自治体による調達など多方面とのチャーミングなシナジーを生んでいけると考えている。

○有川委員

私は、働く女性を応援する本を書いている。本を書くようになったのは40代になってからだ、それまで20代、30代は、いろいろな仕事をしてきた。例えば事務の仕事、施設コンパニオン、塾講師、衣料品店長、ブライダルコーディネーター、カメラマンといろいろな仕事をしており、なかなか安定しなかった。

鹿児島から東京に出てきて、フリーターをしながら何か本を書けないかと探していたところ、私にどんな本が書けるのだろうと考えた。ふと考えついたのが、自分ほどたくさん職場を見てきた人はいないのではないかなということであった。職種だけで50以上、職場だけで100以上、正社員も派遣社員、嘱託、アルバイト、いろいろな経験をして、地方も経験し、都会も経験し、ちょっと海外でも働き、そんなふういろいろな職場を経験してきたので、すべての職場に共通するルールというのを書けないかなと思って書いたのが、デビュー作である。女性の一人として、応援団のつもりで、人間関係とか感情の整理の仕方や、女性リーダーなど女性が働きやすく、生きやすくなるにはどうしたらいいのかなというところで本を書いてきた。実際、私が20代、30代のときに、何でこんなに働きづらいのだろうと思ったことが原点になっている。

本を書き始めてから、日本社会が世界から見たらどのように見えるのだろうかと思い、台湾の大学院で女性のリスク問題を研究してきた。リスクというのは起こるかもしれない危険性であるが、この研究をして、地域、家庭、会社という形がいろいろ変わってきていて、個の時代になったことによって、これまで考えられなかったようなリスクが起きていて、これから先10年もまた起こるかもしれないということである。そのリスクを、女性自身がなかなか認識できず無防備になっている。意外にリスクを察知できていないことを感じた。セカンドチャンスが難しいのも、このリスクが高まっている原因になっている。

これまでさまざまな国に行って働く女性というのを取材してきたけれども、この人たちはすごいと感動させられたのは、実は日本の女性の働きっぷりであった。本当によく

働くし、勉強熱心であり、細かいことに気がついて、そして、同時にたくさんの仕事をこなしていくというのは本当に世界で一番なのではないか。この女性たちが海外に行ったら、本当にすぐにトップになれるのではないかと思うが、その女性たちがなかなか力を発揮できていないというのは、本当にもったいない。

この検討会で、働く女性の立場の視点、外から見た視点などいろいろな視点で日本のすばらしさ、日本の心の豊かさ、心の豊かさを発揮していける方法を皆様と一緒に考えていきたい。

○石田委員

アマーバブログというブログを運営しているサイバーエージェントに2004年に入社、今年で11年目になる。私も2児の母で、今朝も母乳を冷凍し、保育園に届けてきた、子育て真最中である。ウーマン&クラウドというクラウドソーシング・プラットフォームを運営している。クラウドソーシングとは、クラウドというのが群集、ソーシングというのがアウトソーシングのソーシングである。企業が不特性多数の、ワーカーに対して仕事を委託するという新しいワークスタイルの一種で、今まで働きたくても働けなかった女性や高齢者の労働参加を促すという観点で、非常に注目をされているワークスタイルになっている。

STRIDEというのは「女性の“働く”を応援する」というコンセプトで会社を運営している。クラウドソーシングにより、働く機会や正規雇用以外の働き方の選択肢を提供していくことで、女性の活躍を推進していくことに寄与したいと思っている。

女性の支援や新しいワークスタイルという観点で、少しでも貢献したい。

○沖委員

この検討会は非常に地に足がついた委員会で、輝きたいと思っている女性をどう輝かせるか、どのように女性のよさ、男性のよさも出していくか、日本人の「暮らしの質」というのが本当は高いが、それをどのように出していくかという、非常に大きな役割になるのではないかと期待している。

今から28年前、消費財メーカーのプロジェクトマネージャーを辞めて会社を起業した。掃除の会社、ハウスクリーニングの会社をやったが、当時はほとんど、何それ、どういう会社と言われたものであった。家事はいわゆる3Kのビジネス、きつい、汚い、暗い、シャドーワークと言われ、家でやっているのにとお客は全然おらず、苦勞をしてきた。

日本人の暮らしが変わってきたことを実感している。暮らし、物に対して期待をするよりは、むしろ、見えないものを買って、いかに心を豊かにして暮らすかを考える人が多くなった。家事に対する考え方も非常に変わった。男女共同参画型とよく言われるが、男女共同参画の家事が間もなく実現するのではないか。中性の家事、いわゆるやれる人が、やれるものを、やれるときにやる、こういったことが実現できる世の中になって初

めて日本人の「暮らしの質」が表立って上がったなど、人々もやはり実感して豊かになったなという感じが発見できるのではないかと思っている。

今日本人が、表に出ていないのだけれども大切だと感じていることは、日本本来の伝統的な暮らし方、四季折々の非常に繊細な、おもてなしといった、いわゆる日本の習慣である。現代の文明の便利な道具、そして機械、どのように融合させていくか。うまくバランスよくとっていく、そして豊かな暮らしを形成していく。それをやりたいと思っている方が非常に多い。皆さんは日々の暮らしをもう一度見直して、丁寧に紡ぐにはどうしたらいいかということに関心をお持ちの方が多。

ワークバランスも含め、いわゆる家事も、仕事も、男女関係なく、できる人が、できるものを、できるときにやるという時代になって初めて日本人の「暮らしの質」が高まってくるのではないか。

○西郷委員

私は都市計画・建築を専門で、大学生のころ、住民の人が自分たちの町に誇りを持っている町はとても快適であると感じた。そういう町は歴史ある町が多く、歴史ある町で住民の人たちが町づくりをするのを応援する都市計画・建築の会社を立ち上げ、仕事をしてきた。

町の中にはコミュニケーションする場所がなくなってしまった。昔の町は、例えばひさし下で、縁台将棋をやる形で、コミュニケーションをしていた。あるいは海外では、コロネードの下にすてきなベンチがあって、皆がそこでお茶を飲んでいる。コミュニケーションをする場所が町に随所にあると、とても快適な生活が行われると感じた。

私は、町の計画を考えるときに、生活者の目線というものを大切にしたいと考えている。生活者は、そういうコミュニケーションをする場所をとても大切にしている。そして、生活者の目線を持っているかなりの部分が、実は女性である。女性はやはり生活という視点から町を見ている。

近代化というのは、効率を優先したてきしまった。都市をどんどん効率的にした。例えばひさし下の空間は、都市計画で言うと、そもそも道路なのか民地なのかという考え方にたち、道路を広くするというで道路にしてしまった。道路は通行の用に供するものなので、法律的にはとまっていたはいけない、佇んではいけない。コミュニケーションする場所を随所につくっていくという意味でのまちづくりのデザインの仕組みというのはとても大切である。

日本の歴史では伝統的に結、あるいは頼母子講という助け合いの仕組みがある。そこで、そういった仕組みを受け継ぐ形で、市民が共同でディベロップするビジネス、仕組みをつくろうと考え、町づくり会社という発想を提案した。また、地域の人たちが食べているもの、着ているもの、使っているもの、それ自身が非常にすばらしいものであれば、それが商品化されてビジネスになっていって地域の産業になっていくという、ライ

フスタイルをブランド化するという事も提案させていただいている。美しい都市、デザインとまちづくり会社による合理的な土地利用、ライフスタイルのブランド化というものを3つ提案させていただいている。

都市にはおへそのような場所がある。おへそのような場所に地域のいいものが集まっていた。昔、大店という言い方があった。大店は、製造、卸、小売もしていた。例えば私がお手伝いをした川越では、種屋は農家に対して、こういうものがあれば売れるとってプロデュースをしていた。また、漆の産地では、問屋は、その店はこういうものをつくったら売れるとって職人さんにつくってもらう。そのリスクは自分たちが負うのだけれども、プロデュースという形で産業を起こしていく。そういった仕組みが、地域にいきづいていた。

地域のいいものが町の中に集積していくことがとても大切で、ヨーロッパでは小さな町ほどにぎわっている。豊かな自然と美しい町というのがセットになって初めていい地域ができていく。日本は小さな町ほど衰退しているが、自然を活かした美しい町をつくるという発想が大切である。

では、美しい町をどうつくるか。おへそのような場所からということが重要。1,000人ぐらい人が集まると、昔はよろず屋があった。今はコンビニエンスストアである場合が多いが、みんなが集まって楽しい場所というのをまさに生活者目線でつくっていったらよいのではないか。

公共のトイレを快適にするというのはとても大切で、安全で、快適な場所はコミュニケーションも始まる。おへそのような場所を生活者目線で快適につくっていくことをぜひ議論していきたい。

○白土委員

電通に入社したのは雇用機会均等法の施行前で、女性はほとんど事務職であったが、外資系クライアントの担当営業局の営業員に欠員があり現場人生が始まった。コンベンションプロデュース、マーケティングプロデュース、ブランドストラテジー、コーポレートコミュニケーションと、20局ほど異動し、最終的にソーシャル・マーケティング部とサステナビリティ研究部の立ち上げに携わることになった。しかし、広告会社はクライアントの商品・サービスをプロデュースすること、プロモートすることが主業務であり、本当にサステナブル社会に本当に貢献しているか甚だ疑問であった。マーケティング・コミュニケーション自体は、生活者のパーセプション（意識）をAからBにシフトさせ行動変容を起こすというニュートラルなものなので、大量消費とは逆の、最適消費、最適流通、最適生産、最適調達を促すためのリバーススイッチを押せないか？と次第に考えるようになっていった。卒業制作とも言える、サステナブルモデルの商品開発につながる事業に携わることが叶ったため、昨年早期退職に応募した。

大手製菓会社が、「世界の子供の笑顔のため」の周年謝恩事業として、チョコレート

商品の売上の一部を、外資系NGOを通じてフィリピンの小学校建設に充てるキャンペーンを展開していたが、どうもうまくいかないにご相談があった。カカオといえば児童労働と言われるほど、チョコレートの恩恵に預かる企業にとって児童労働は避けて通れない大きな原罪であり、リスクヘッジの視点からも最優先で取り組むべきと提案し、ガーナのカカオ農家支援事業を進めていた日本のNGOをご紹介した。当初は寄附だけだったが、数年後には児童労働がないカカオでチョコレートを製品化し、キャンペーンを支えて下さったお客様と流通関係者に商品としてご報告するという快挙を成し遂げて下さった。

これこそ商品・サービス自体が環境や社会的課題に配慮したサステナブルモデルにならないければ、サステナブル・ライフスタイルはおろか、サステナブル社会も実現しない、という課題にチャレンジしたモデルの好例である。

在職中は、ユニバーサルデザインにも長く携わり、盲導犬、聴導犬、介助犬のパブリックアクセスを身体障害者補助犬法で保証する「Welcomeほじょ犬！」のピクトグラム・サインを厚生労働省に無償でご提供した。子供にも読めるよう平仮名で「ほじょ犬」とし、従来「入場可」だった表現も、歓迎の気持ちを込めて「Welcome！」に変えた。

現在は、ロンドンと同様、東京オリンピック・パラリンピックでもフェアトレード調達を実現するための提案活動をNPOと一緒に進めている。

今回のテーマに対しては、専門領域であるサステナビリティという視点からご提案したい。女性の社会参画推進は素晴らしいが、それ自体が目的ではないと思う。最終的な目的は、日本がどういう国になりたいのか？であり、女性がより積極的に目指す国づくりに貢献するためにはどのような環境を担保するべきなのか？という視点が必要だ。目指す未来社会からバックキャストした上で、実現に向けて足りないものを補いカイゼンしていくロードマップが重要となる。

また、女性は男性とどう違うのかという定義も必要と考える。小柄だとか、力が弱いとか、持久力があるとか、コミュニケーション力が高いとか、社会性があるとか、おせっかいであるとか(笑)。関西の人間生活工学研究センターでは、男女はもちろん、多様な年代や外国人まで含めた人体部位などのデータを整備しているので参考になろう。検討会では「すべての女性」という表現となっているが、赤ちゃんから介護施設にいらっしゃる方に至る女性のどこまでを包含するのか、これも重要な点と考える。

特殊解だったバリアフリーは、ユニバーサルデザインとして一般解化されたことで市場が広がり、みんなの暮らしやすさにもつながった。CSRも導入当初は誤解を受け義務的に嫌々という部分があったが、最近になって漸く「地球社会と自社の将来リスクの合致点に積極的にコミットすれば、社会的責任も果たしつつ自社もサステナブルに成長していける」という本来のコンセプトが理解され積極的な投資が進んでいる。女性を取り巻く課題解決を義務的に捉えるのではなく、チャレンジを通じた取り組みが梃子となって、みんなの笑顔につながる社会が実現することを願っている。

○ 藺田委員

CSRを本業でやっている会社である。もともとは1988年に、女性がもっと能力を発揮できる場をつくりたいと、初めはマーケティングの会社からスタートした。問題意識としては、社会をよくしていくためには、女性が絶対重要である、サステナブルな社会に向けて何ができるのだろうと考えたときに、企業はやはり大きな影響力があるので、企業を動かすことによってグローバルに持続可能社会をつくっていくことができるのではないかと考えた。

CSRだけではなく、赤池さんと一緒にやっていますCSV、クリエイティング・シェアード・バリューという、社会課題に対して企業がいろいろな、自分たちがリソース、ソリューションを使いながら持続可能社会をつくっていくということも一緒に推進をしている。数百社の企業とつき合う中で、に今一番大変なのが実は鬱の問題。ストレス社会で、当然企業も設けるべきいろいろな目標があり、ストレスがたくさんある。女性の方も含め、男性も鬱になっている。大きな問題である。

私はちょうど阪神・淡路大震災を神戸で被災した。東日本大震災の際、ボランティアでかかわり始めた活動の中で、被災地の若者とか女性たちの応援の会を作り、結結プロジェクトというものを始めた。リーダーを応援して、1年目はみんな頑張ろうという感じでやっていたが、1年目を過ぎたあたりからみんな心が折れ出した。特にリーダーで頑張っている方が、もう自殺したいとか、もうこんなことをやってられないとか、本当に空虚感とか絶望感と。これを解決するために見つけたのが、アメリカでPTSDの解放のために開発されたエモーショナル・フリーダム・テクニックというカウンセリングの手法である。今まで5カ所で355名の方にやってきたのですが、本当に驚くべき効果があって、9割以上の方々が非常に楽になった。本当に自殺を考えたような方々が今はすごく元気になられている。

これを使えないかと考え、企業内研修をやってきたが、やはり効果があると。イギリスでも使われており、実際にルワンダやハイチの地震被災地に行かれた方々のストレスケアの方法として有効である。

皆、日々のストレスはあると思う。簡単なつぼを刺激しながら、カウンセリングをするという手法で、イライラ、ドキドキするときに刺激しながら、「ああ、いらいらした、いらいらした」と言うだけで感情が解放されるという、本当に非常にシンプルなテクニックであるがやっている。しかし、残念ながら日本はこのような心理療法、カウンセリングは本当に遅れている。アメリカ、イギリスではすごく発達していて、普段からストレス解消、自分たちのマネージメントで使っている。ストレスがなくなるだけでもすごくハッピーな社会になってくると思うので、ぜひ今回の検討会の中でもこのストレス解消法を是非提案させていただきたい。

○高島（宏）委員

私たちのお客は9割ぐらい女性であるので、女性向けのサービスを提供しているという立場と、社員の半分ぐらいが女性なので、女性を活用しているという両方から参加させていただきたい。

当社はインターネットを中心に、野菜だけではなくいろいろな食品の販売をしている。基本的にはつくった人が自分の子供に食べさせられるものだけ売るということで、農協を経由せず、全国各地の農家と直接調達をして、その商品を直接、主にインターネットを通じてお客に届けることをしている。

多くが妊娠されたころから、お子さんを出産されたあたりからオイシックスを始められる方が非常に多い。女性の客が9割ぐらい、30~40代の方が7割ぐらいおり、自身がおいしいものを食べたいという以上に、御家族、特にお子さんの安心安全のためにオイシックスを利用される、そのようなサービスを提供している。

最近私たちが売っていて女性の生活の変化を感じたというものとして、忙しいママ向けのサービスKit0isixというものを最近始めた。レシピ付きの素材のキットである。カット野菜とか下処理をした素材をお届けして、20分で2品できるということで、素材はすべて有機野菜とか無農薬、当社の基準を通ったものだけをお届けするというので、1年ちょっとやっている。先ほど赤池委員に御紹介いただいたキッズデザインアワードをいただくなど非常に伸びている。この背景として、時短というのは非常に大事な概念なのですが、単に時間が短ければいいというものでもない。後ろめたくない時短というか、できれば家族に対して誇らしく思える時短、あるいは心を豊かにできるような時短、そういったものが求められているのかなということを感じている。

当社で働く女性のことを紹介したい。当社は全部で700人ぐらいの従業員がいる。お客は女性が90%で、社員は約半分弱が女性です。特徴としては、やはりママのお客が多いということと関係あるが、育児休業の取得率は100%で、戻ってくるのも96%で、我々みたいなITベンチャーだとなかなかここまで高いことはないかと感じている。

私たちの場合は、最初の30人まではほとんど男性だけだった。私は26歳でこの会社を立ち上げていて、ほとんどプログラマーとか20代前半の男性30人から、女性、特にママと私たちが一緒に働くような環境をつくっていくというのは非常に難しい部分もあって苦労しながらやってきた。女性の活躍ということを考えるときに、男性が敵対概念になってしまうとなかなかうまくいかないことがすごく多く、女性が活躍したほうが男性にとっても、あるいは企業にとってもいいという環境をつくっていけないと痛感している。そのための仕組み、あるいはカルチャーをつくっていくことが大事かなと考えています。この委員会で私はあくまでも男性目線で参加をしていきたい。

○高島（郁）委員

我々の会社は、フランフランというライフスタイル型のホームファッションストアと

いうものを行っている。会社としてはバリュー・バイ・デザインという、デザインで付加価値を高めていこうということでやっているけれども、デザインといっても、一般の日常の暮らしをさらに豊かにするようなデザインということに心がけている。

我々の会社は女性とは切っても切れない会社であり、お客は9割女性である。従業員も75%、今1,700人ぐらい女性がいて、管理職は35%とまだまだ低いけど、毎年入ってくる新卒は約60人、それも90%以上は女性である。女性を考えていかないと企業が成り立たないような会社である。女性が働きやすいというのは、我々は労働力としてもそれは必ずやっていかないとけない宿命にあり、どうやって活躍してもらおうかなということ日々考えている。

女性はライフステージが男性と違って大きく変わる。結婚、出産などに対して、産休、育児休業があります。店長レベルが時短で働くということは避けて通れない状況で、時短の店長はたくさんいる。小売業であるから土日が休みというのは考えられないが、土日休みの店長というのも何人もいて、土日はお客に接客をすることが主となるので、平日にしっかりしたオペレーションをすれば、そのような働き方をしている店長もいる。

我々の会社は生活に非常に根差している仕事である。日々の個人の生活はすごくビジネスに直結している。自分たちがどうやって食事をしたい、あるいはどうやって家族で暮らしたい、そういうことが実は商品とか接客に非常に裏づけされる仕事であり、長く働いてほしいといつも思っている。そういう中では、時短勤務、土日休み、あるいは今検討中ですけどワークシェアである。1つの店長を2人でやるとか、そういったことも考えて良いと思っている。

定年をやめようと思っている。私はあと2年で還暦だが、私の父も85歳でまだ働いているし、70代でも元気な方はいっぱいいるし、定年というのは別に意味がないのではないかと思っている。もちろん体の具合や職場の環境はあるが、定年をできれば撤廃して、いつまでも若々しく働けるような会社を目指していきたいと思っている。

個人的に思うことをちょっと申し上げたい。女性は専業主婦をされている方、あるいはフリーターで働いている方というのは健康診断を受けていない方が非常に多い。やはり暮らしというので大事なものは健康だと思うので、専業主婦の方、あるいはフリーターで働いている若い方が年に1度とか健康診断を受けられるような状況にさせていただくと良いと思っている。

日常を豊かにするという事は非常に大事な事だが、その中では、いわゆる産業の公序良俗というものもあるのではないかと考える。私はよく多摩川を走っているが、野球とかサッカーをやっている少年を見るとすごくいいなと思う。反面、ゲームをやっている少年たちはたくさんいる。これがどうやって将来、世の中が変わっていくかなと思うとやはり不安なこともある。我々含め、スマートフォンをずっと見る。見ていけば見ているほど四季の移り変わりというのはわからなくなる。多少なりとも工夫した日常にならないかと思う。

○枅野委員

私は、横浜の鶴見にございます建功寺という禅寺の住職を務めている。寺の住職を務めながら、庭園のデザイン、禅の庭というのを中心としている。日本の空間のデザインを日ごろ行っている。また多摩美術大学の環境デザイン学科で教鞭をとっている。近ごろ、この7～8年ちょっと執筆や、講演を重ねている。私は海外プロジェクトが多いものですから、年間15～16回は海外へ出ている。今抱えているプロジェクトも、アメリカ本土、イギリスの隣のマン島、香港、インドネシア、中国、もちろん日本もあるし、多分6～7カ国になっている。

日ごろ私たちはどのようにして生活の中に豊かさを感じていったらよいのか。物が豊かになることが豊かさを感じるのではなくて、心が、あるいは精神的な豊かさを感じるということのはもっと大事なのであろうということ常々思っている。これは禅が昔から説いていることだが、これまでの社会というのは、やはり物の豊かさ、それが生活の豊かさといコールだという方程式のもとに全員がひたむきに走ってきたわけですが、心の問題がそれに伴ってこないと本当の豊かさが実感できない。もっと言うならば、今ここに生きていられることがありがたい、ここにいられることがありがたい。そして、日本人はやはりこの四季の移り変わりの中に自分の身を置くということを実感にとらえているわけですが、そういうことが実感できるような町をつくったり、都市をつくったりしていかなければいけないのではないかと思っている。

女性が輝く社会、これは実は女性だけではなくて、私は人が、人々が、すべての人が輝く社会をつくり上げなければいけないと思っている。ただ、今までの歴史の中で、女性が非常に不利な状況であるとか、束縛されるような状況があったから、それを改善していくということであって、すべての人が輝くということは、生きていくことがありがたい、生かされていることがありがたい。この自分たちの命を使ってどう世の中に貢献していくか、あるいは役に立っていくかということ自分の生きていくことを実感できるのではないかと思っている。それが、ある方はビジネスであり、ある方は家庭でもあるのではないかと思っており、それぞれの方がなすべきことができる社会をどうつくっていくか、ここがポイントになるのではないかと思っている。

私が常々感じているのは、昔の暮らしと現代の暮らしをどう折り合いをつけていくか。昔の古い暮らしが全部悪いわけではなくて、たくさんその中にいいものがあったが、それが今は忘れ去られてしまっているところが多い。それをもう一度復活させて、現代の社会の中にそれを生かしていくことが大事なのではないかと思っている。

具体的に申し上げますと、3世代型の住宅をもっと積極的に進めたらいいのではないかと。そうすることによって若い方々はどんどん社会にも女性が出て行くことができる。それから、親の介護の問題も身近な問題として解決ができていく。あるいは看取りの問題も解決ができていく。あるいは孫の面倒を見てもらうとかいろいろなことが

考えられるのですけれども、これを税制とか何かでうまく優遇して、あるいは昔のように1軒の家にというのではなくて、同じマンションの中に3世帯が入ったらそれでもそういう考え方をとるとか、それは解釈の仕方だと思うのですが、そういうことができたらいいのではないかと思っている。

○やました委員

断捨離というのは、引き算の視点、引き算の思考、引き算の解決法と理解していただければと思っています。私たちは足し算、足し算、足し算を繰り返してきた、その足し算がどうも解決にはつながらず、その解決自体が既に機能不全を起こしているのではないかとことを皆さん何となく感じているか。それを日常の片づけ術に私自身は落とし込んだ。何となれば足し算、物を足し算、足し算してきた結果、片づけられない、片づかないという状況に女性が追い込まれる。その片づかない状態に自身も追い込まれ、自己肯定感を損なっている女性がすごく多かった。そして自己肯定感の一番ない症状が、私は鬱病である。足し算をした結果こうなったのであるならば、家庭内で過剰にため込んだものを引き算していくと、もしかして前より違った形で解決が進むのではないかと思ひ、断捨離を提唱している。

命の入れ物である体、その体の入れ物である住空間が損なわれていること、それは取りも直さず命が損なわれていることだ。空間からのアプローチ、住空間という空間からのアプローチで私たちを回復させていこう、それが断捨離である。

私自身、外に向かって断捨離を発信し出したのが十数年前である。それまでは小さな事業を営む夫の稼業の手伝いをしながら、ほとんど主婦という形でやってきた。それで、主婦がいかに自分の、本当に命を育む大事な仕事をしているにもかかわらず、主婦自身が主婦の仕事に肯定的ではない。その肯定的ではないこと自体に陥って、さらに自分自身を否定しているという姿をずっとずっと見てきた。そこで、主婦の仕事、つまり住空間をクリエイトしていくこと、それから食事、すべてですね。家事が命を育むのだということの原点に皆さんが立ち戻っていけるお手伝いをしている。

断捨離ということを皆さんに伝え出すとき、職業名がクラターコンサルタントという肩書を使い始めた。クラターというのはclutter、がらくたのことである。このがらくた、クラターというものをひもといていくと、物の形あるがらくた、そして、その形ある物ががらくたが住空間に取り散らかっている状態もクラターである。そして、心や頭の中の混乱、混沌も実はクラターである。つまり、物ががらくたと心や頭の中の見えないがらくたが相似象的に展開しているということがよくわかった。心の中や頭の中を整理整頓するにおいて、物からアプローチしようという手法をとった。

結局のところ、そぎ落としてこそ際立つ。そぎ落として、そぎ落として際立つという美意識である。日本人がもともと持っていた美意識の取り戻しにもつながって、そして、削ぎ落とした結果、自分の際立ったものを女性、女性に限らず男性も、すべての人がそ

の際立ったものを発見していくというお手伝いまでつなげたい。おもしろいことに、今、断捨離というのがどういうわけか中国で大ブームである。何度も中国に呼ばれているが、獲得、獲得、獲得に走ってきた、足して、足して、足していくことを求めてきた中国の人々が非常に断捨離に興味を持っている。その断捨離の可能性というか、断捨離でよりよい世界、それが住空間から町へ、町から地域へ、地域から社会全体、世界につながるということを感じて活動している。

○横山委員

住宅の設計といってもデザイン重視の設計事務所、構造重視の設計事務所などさまざまな設計事務所がある。私は100%住宅設計であるが、家族のきずなを強くする住まい、家族のコミュニケーションをどうしたら強くする住まいにできるか、そういったものを設計のコンセプトにして、家族から住まいを考えるという視点で設計に取り組み、講演を行い、また何冊かの本も書いてきた。住宅は社会を映す鏡、住宅問題は家族問題という言われ方をするが、戦前から戦後を振り返ってみて、社会の変動、テクノロジーの進化、そして女性の社会への進出によって住宅は驚くべき変容を遂げている。暮らしはとて豊かになって、快適で便利になったが、住宅で言えば設備、素材、そういったハードの部分はすごく進化した。一方、親と子のコミュニケーション、スキンシップはどうやってとるか、あるいは洗面所も、ウォシュレットという世界に誇るべき便器ができたのですが、その空間、広さ、本当に居心地いい空間かどうかというソフトの部分がこれまで非常にないがしろにされてきた。

戦後、60年前からずっと、アメリカのモダンリビングが入ってから2LDK、3LDKというのは、これだけ生活の体系が変わってきているのに、今でも2LDK、3LDKの住まいの間取りが定着している。そういったことを含めてソフトの部分が非常に弱い。だから、そのソフトの部分を大切にしていかないと豊かな住まいにもならないし、また、女性も幸せにならないと思っている。

データによると、これだけ便利なシステムキッチンとか、掃除だとか、電子レンジとか、そういったものが出ているにもかかわらず、20年前から比べると家事労働時間というのは1分ぐらいしか縮まっていない。そして、私の設計事務所に打ち合わせに来る家族の共働きの女性、小さなお子さんを連れた女性もみんな疲れた表情とストレスをため込んでいる。明日へのすばらしい生産の場になるような住まいはどんな住まいか。やはり専業主婦であっても、働いている人であっても、1畳でも、半畳でもいいから自分の小さな書斎を持つだとか、そういったものを含めてこの検討会で何かそのような提案もできていきたい。

(4) 検討会の趣旨及び進め方について

華房推進室次長より、検討会の趣旨について、資料3に沿って説明。続いて、検討会

の進め方について資料4に沿って説明。その後、提案募集について、資料5に沿って説明。最後に、資料6に沿って、本検討会の議事内容の公表について説明。併せて、事務局のメンバーを紹介。

(5) 意見交換

○有村国務大臣

本会合は、私が強くハートを寄せている分野の一つである。「暮らしの質」というアジェンダ・セッティングも私の発案によるものである。今日の話聞いて、それぞれの発信をテレビや書物などで拝見していて、皆様には、ぜひ本当に御貢献いただきたい部分の共通点がある。

まず1つ、みずみずしい感性を持っていること。日々の暮らしを舞台、ステージにして、深い洞察力を持っていること。空気を読むのではなくて、場を読む力が非常に強いこと。非常に聡明な感性をお持ちであること。芯のある生き方、哲学があること、貫いていること。

門倉多仁亜さんは、きょう初めてお目にかかったが、御本人が3分でおっしゃっていただく以上に、紹介を30分は言える。私もやましたひでこさんの「ダンシャリアン」である。フランクランにもよく行く。セルリアンタワーでお庭をつくっていらっしゃることも、それぞれのことを勉強させていただいている。

本検討会は、菅内閣官房長官の決裁で開催されている会で、そういう意味では非常に格の高いフォーマルな会である。単に内閣官房がやっているというのではなくて、省庁横断で、それぞれの省庁に御協力いただける組織にしている。これは本当に私たちにとってラッキーなことだと思っている。古谷副長官補という、ほかの官僚の方が敬意を持たれるあの方が座っていただいているということがすごいことで、本当にラッキーなことである。

私が目指しているのは正統派のやんちゃである。やんちゃでなければ突き抜けることはできない。同時に、正統派でなければ国民の皆さんの理解や共感も得られない。是非、正統派のやんちゃの骨ある御提言をいただきたい。

公金が入ったこの会であるので、言いつ放しにならないこと、数回しか会を持ってないような中で、どのように行政としてやっていくのかという具体的な落としどころを考えながら議論をスタートしなければいけない。単にシンポジウムで何となく楽しかったねで終わることが許されない会でもある。最初から、行政としてこれをやる、だから皆さんに呼びかけはこのようにする、ということをお考えいただきたい。それぞれの持っている御発信力でどんどん発信していただくということは大歓迎である。私たちが通常、政党や政治あるいは行政の中でアプローチでき得ない国民の皆さんへの啓発とか、すてきな発信ということを御期待申し上げたい。

安倍内閣では、クールジャパンという政策をやっている。担当は山口大臣であるが、

その前、前任者は稲田大臣がやっていた。ここの分野で出てくる話は、プロデュースの仕方によってはクールジャパンそのものである。ふつうだと思っけていても、実はクールジャパンというようなところをどうプロデュースするか。私たちのセンサー、センスがかかっている。しっかりとした、浮わつていない芯のあることを用いながら、それを格好よくプロデュースするということ。ポップで、かつ地に足がついていて、かつ税金の使い方に対して効果的である、ちゃんと説明責任を負えるという、今までになかった次元のことにチャレンジをしようとしている。それゆえにハードルも高いし、おもしろさのエネルギーもある。ダイヤモンドの原石のようにうまくいくか、あるいは単なる石ころで終わるかかわからないというリスクをみんなで乗り越えていこうというところでスタートしている。皆様の御意見をこれからもお聞かせいただきたい。

日本社会に何を残せるかということを目日毎日考えている。その中で私は、やはり日本のトイレというのは世界に誇れるものだと思っけている。横山委員がおっしやった、スペースの面積や、本当にそれが快適なのかどうかということはある。2020年のオリンピック・パラリンピックに向け、日本のトイレは世界で最も快適で、そして美しいトイレであるというのは、日本の美しい民族性、あるいは公共のスペースをみんなで大事に使うということ、これはほかのどれだけ経済指標が高い国にも負けない。トイレは競争力がある。これをきれいにパッケージングしていかなければいけない。

人が自由を謳歌する中で、活動や日々の暮らしをしていく中で、移動ということがスムーズに快適に、母乳をあげている方でもちゃんと移動を担保するということは先進国の豊かさの一つだと、安全にもかかわることだと思っけている。

何かの成果を必ず出していかなければいけないという行政の会である。結論をみんなで生み出していかなければいけないという、その責任を負いながらのスタートだということをおあらかじめ御報告させていただいて、お力をいただきたいと思っけている。

○西郷委員

コミュニケーションする場所が大切であるが、町の中にコミュニケーションする場所がどんどんなくなっている。例えば大規模開発したら、その中にそういう場所がつくられている場合もあるが、まち全体につくっていくことが必要である。セミパブリックとって誰でも自由に使える場所、地域の人たちが自分たちで管理するコミュニケーションの場、それは小さな場所でもよい。例えば、まちの縁側という発想がある。コミュニケーションする場を随所につくっていく、そういう発想はこの「暮らしの質」と表裏一体だと思っく。ぜひテーマの一つに加えていただきたい。

○高島（宏）委員

進め方について、先ほど大臣がおっしやられた絶対に結果を残すのだというのは私も大賛成である。「すべての女性が」としている時点で結構総花的になりやすいテーマで、

テーマの断捨離が必要なのではないか。次回、検討会で関係団体からヒアリングして意見交換だと、何となく総花的なままに話が進んでいってしまうリスクがあるかと思っていて、どこかのタイミングで、どの領域でこのチームは結果を出すのだということのコンセンサスをとるような時間をつくったほうがいいのではないか。

○白土委員

今回の事業におけるKPI (Key Performance Index) 主要指標は何なのか？の合意、そしてPDCA (Plan, Do, Check, Action) を通じてカイゼンしてゆくスパイラルにつなげてゆくためには、事業の総括が重要だと考える。国も企業も従来はやりっ放しという傾向が多かったような気がするが、今回はこのやり方をぜひ採用して頂きたい。

○赤池委員

皆さんと同意見だが、社会実装として成果を出すためには、間違いなくプライオリティを明確に決めていかなければいけない。そのときに一番のポイントは、子育て弱者に対する支援から始めてほしい。本当に2世帯に1人が平均年収に行かない、特に母子家庭の子供たちの例えば教育をどう考えるかとか、そういうカスケードの順番を間違わずに施策の取りまとめをやっていただきたい。

○高島（郁）委員

いち早く実現できるということもすごく大事なことである。今ある仕組みだ、今あるものをちょっと変えれば広がるということもあるかと思う。先ほどおっしゃられた寄れる場所、実は公民館というのはたくさんある。しかし、公民館が、呼び方も公民館ですし、ちょっと変えれば施設があるのを有効に使えるのではないかということがたくさんあるのではないか。

(7) 閉会

宮原座長より、次回は12月下旬を予定している旨報告し、閉会。